

漢語音 ts-, tsh-を表記する満洲文字
—文字作成手順に反映した満語音韻—

吉池孝一

1. はじめに

遼代と金代に使用されたモンゴル語の系統とされる契丹語の固有語に ts, tsh の音はなく、漢語からの借用語音の ts-, tsh-, s- を契丹小字で表記するばあい、①先ず契丹語音 s を表記する契丹小字 **𐰺** s を用いて漢語音 ts-, tsh-, s- の三種を表記する段階があり、②次いで漢語音 ts- を析出して **𐰺** ts で表記し、tsh-, s- を **𐰺** s で表記する段階があった。金代に入ると、③漢語音 tsh-, s- から、tsh- を析出して **𐰺** tsh で表記するようになった。**𐰺** s → **𐰺** ts → **𐰺** tsh の順で文字があてがわれ、それぞれの文字の使用までには時間的なずれがある^①。

以上は契丹小字の状況である。モンゴル語と同じアルタイ系の言語に属すとされるツングース諸語の満洲語の固有語にも ts, tsh の音はないとされる。漢語からの借用語音の ts-, tsh-, s- を満洲文字で表記するばあい、モンゴル文字を利用した無圏点満洲文字では^②、借用語音の ts-, tsh-, s- のすべてを **ᠰ** s で表記した^③。漢語音 ts-, tsh-, s- をすべて満洲

① 契丹小字の区別の仕方については吉池孝一(2003)「漢語の精母系子音を表わす契丹子小字について」『KOTONOHA』13(18-21頁)参照。この論文は吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著『契丹語と契丹文字』愛知：古代文字資料館、2020年12月発行、84-88頁に所収。

② 1599年(明・神宗の萬曆27年)、後に清の太祖となるヌルハチ(努爾哈赤)は、大臣のエルデニ(額爾德尼)とガガイ(喝蓋)に命じて、モンゴル語を表記するモンゴル文字(ウイグル式モンゴル文字)を利用して満洲語を表記させた。この時期の文字が無圏点満洲文字とされるものである。以上は金啓琮(1981)『滿族的歷史與生活—三家子屯調查報告』45-56頁、哈爾濱：黒龍江人民出版社。池上二郎(1994)「満洲語文語の正書法の沿革—特に o, u, ü について—」『東方学』88、100-110頁を参照。

③『清太祖朝老滿文原档(第一冊)』(廣禄・李学訳注(1970))は無圏点満洲文字をローマ字になおして漢訳を付したものである(無圏点満洲文字は k と g, t と d, a と e, o と u などを区別しないが、有圏点満洲文字は区別する。有圏点文字の区別を勘案しメレンドルフ式のローマ字転写によって表記したもの。Möllendorff, P. G. von (1892))。その中に出てくる漢語借用語のうち、ts-, tsh-, s- をもつ単語を挙げると次のようになる。数字は掲載ページ数。同じ単語が重複して現れる場合は最初の単語のページ数のみをだす。

■漢語音 ts-

〈満洲文字ローマ字標記(漢語) 頁数	〈漢語音)	〈対応する満洲文字)
ja-se (寨子) 1	子 ts-	← 満洲文字 s
guwei-se (櫃子) 76	子 ts-	← 満洲文字 s
leo-se (樓子) 97	子 ts-	← 満洲文字 s
tang-se (堂子) 101	子 ts-	← 満洲文字 s
sui (罪) 9	罪 ts-	← 満洲文字 s

文字 s で表記するわけであるが、当時の満洲人が漢語音 ts-, tsh-, s- をすべて満洲語の摩擦音 [s] で発音したのかというと、そうではないであろう。文字の区別がないだけで、発音の区別はあったかもしれない。当初満洲人は自分たちの文字を持っておらず、モンゴル文字を借りて満洲語を表記した。それが無圏点満洲文字のはじまりの姿である。モンゴル文字には、もともと漢語音 ts-, tsh- を表記する文字はなく、モンゴル語の [s] を表記する文字 s で漢語音 ts-, tsh-, s- を表記した^④。そのモンゴル文字に拠った無圏点満洲文字にも当然のことながら文字 s しかなかったわけである。仮に当時の満洲語の固有語に ts, tsh という音があったとしても、また仮に当時の満洲語に漢語音の ts, tsh が浸透していたとしても表記する術がなかった。

やや後代の有圏点満洲文字では^⑤、従来の無圏点満洲文字に丸（圏）や点を加えて文字の種類を増加させて満洲語の発音の区別をするとともに、漢語からの借用語を表記するために新たな文字を作った。新たに文字を作ったり、運用法を変えたりする場合、そこに当事者の発音の習慣が反映する場合がある。その意味で、有圏点満洲文字で書かれた満洲語文語の検討は興味深いものである。無圏点満洲文字によるかぎり、満洲語文語に漢語借用語音の ts, tsh が定着していたか否かを知る術はないが、有圏点満洲文字によるならばある程度わかる。漢語音 ts-, tsh- を表記するために、新たに文字  ts と文字  tsh を作ったから、もしも満洲語の固有語にも ts, tsh という音があったならば、新たに作った文字  ts, 文字  tsh で固有語を表記したはずであるが、そのような例はなく、表記したのは漢語からの借用語だけである。その点について福田昆之編『満洲語文語辞典』によって用例を見ると表記の仕方になかなか興味深い所がある^⑥。辞典にはいろいろな時代の満洲語とさまざまな質

can-sun (千總) 87	總 ts-	←	満洲文字 s
be-sun (百總) 87	總 ts-	←	満洲文字 s
sung-bing-guwan (總兵官) 38	總 ts-	←	満洲文字 s
■漢語音 tsh-			
san-jan (參將) 9	參 tsh-	←	満洲文字 s
■漢語音 s-			
su-jo (蘇州) 85	蘇 s-	←	満洲文字 s

④ 亦鄰真(1987)により元代のモンゴル語文中の漢語借用語をあげる。

■漢語音 ts-: sinksi (曾子の、曾と子)、sank (藏、匠)、si (紫、資、集)、sink (贈)、soo (左)、sonk (總)。■漢語音 tsh-: sank (倉)、sam (參、僉)、san (錢)、si (齊)、sin (秦)、sink (青、清)、soin (全)。

亦鄰真(1987)『元朝秘史・畏吾体蒙古文復原』、内蒙古大学出版社。亦鄰真(2001)『亦鄰真蒙古学文集』713-746頁、呼和浩特：内蒙古人民出版社による。

⑤ 1632年(清・太宗の天聰6年)に、太宗のホンタイジ(皇太極)の文字改革の命を受け、ダハイ(達海)は無圏点満洲文字に丸(圏)や点を加えて発音の違いを明瞭にするとともに漢語からの借用語音を表記するために新たな文字を作った。以上は金啓琮(1981)『滿族的歴史與生活—三家子屯調査報告』45-56頁、哈爾濱：黒龍江人民出版社。池上二郎(1994)「満洲語文語の正書法の沿革—特にo, u, ūについて—」『東方学』88、100-110頁を参照。

⑥ 福田昆之(1987)『満洲語文語辞典』(この辞典のローマ字表記は、漢語からの借用語音 ts-を“z”で表記し、漢語からの借用語音 tsh-を“zh”で表記する。ここでは混乱をさける

(小説から公的な文書まで)の満洲語が混在しているので研究の対象とはしにくい、満洲語文語で起りえる“ほぼ全ての例”が含まれるから使い方によっては得難い資料となる。sui-erun (罪刑)は、suiが漢語の罪 tsui で erun が固有語である。同じく sui-cecike (翠雀「カワセミ」)は、suiが漢語の翠 tshui で cecike が固有語である。漢語音 ts-, tsh-は両方とも文字 s でも書かれている。文字 s でも書かれる漢語音 ts-, tsh-を含む語は、満洲語風に訛って発音されたもので、満洲語に“なじんだ語”とすることができる。tsai-siyang (宰相)は tsai も siyang も漢語であり、tshui-ilha (翠面花)は tshui が漢語で ilha が固有語である。漢語音 ts-, tsh-は文字  ts や文字  tsh で書き分けられているけれども、必ずしも満洲人が ts や tsh の音を発音できたとはかぎらない。満洲語文語の読み書きができる文人は発音できたと想定して大過はないであろうが様々な状況があり得る。常に漢語風に発音できる人、文字表記として文字 ts や文字 tsh を書き分けるが発音については常に満洲語訛りの s で発音する人、漢語を話すときは ts や tsh を発音するが満洲語に言葉を切り替えたときには訛って s となる人など実際は様々であろう。なお、有圈点満洲文字によって表記された満洲語を辞典でみるかぎり、満洲語の固有語に ts や tsh という音はない。初期においては漢語からの借用語音の ts-や tsh-は満洲語の固有語音 s で発音されたと想定し得る。これらの点は、遼金代の契丹語や元代のモンゴル語と状況は同様である。

有圈点満洲文字は、先にあげた契丹小字とは異なり、ほぼ同時期に作られたとみてよいから、文字  ts と文字  tsh の作成において時間的なずれはないであろうが、どのような手順で新たな文字が作られたかということについては問題にしてよい。手順としては下記二つの可能性がある。

①文字  s →文字  ts →文字  tsh

ため、“z”を“ts”、“zh”を“tsh”と書き直して提示する。単語における音節の切れ目にはハイフン-を付す。)により漢語借用語の例の一端を示せば次のようになる。

■漢語音 ts-

tsai-siyang (宰相)	宰 ts-	← 文字 ts
fei-tsoo (肥皂「せっけん」)	皂 ts-	← 文字 ts
sui-erun (罪刑)	罪 ts-	← 文字 s

*sui は漢語“罪 tsui”の音訳。erun は満洲語で刑。

■漢語音 tsh-

tshan-jeng (参政)	参 tsh-	← 文字 tsh
tshui-ilha (翠面花)	翠 tsh-	← 文字 tsh
deng-tshoo (灯草「灯芯草」)	草 tsh-	← 文字 tsh
sui-cecike (翠雀「カワセミ」)	翠 tsh-	← 文字 s

*sui は漢語“翠 tshui”の音訳。cecike は満洲語文語で雀。

■漢語音 s-

sung gurun (宋国)	宋 s-	← 文字 s
-----------------	------	--------

*sung は漢語“宋”の音訳。gurun は満洲語文語で国。

fu-sa (菩薩)	薩 s-	← 文字 s
sui-gung (歳貢「貢物」)	歳 s-	← 文字 s

②文字  s → 文字  tsh → 文字  ts

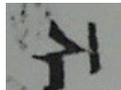
本稿は、平凡な結論であるが、①とする。論拠は二つで、一つは文字  tsh の書き順であり、一つは満洲語破擦音における二項の音の対立の仕方との関連である。それを述べるのが本稿の目的である^⑦。

2. 新文字 ts と tsh の作成手順

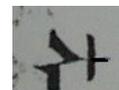
有圈点満洲文字には、漢語からの借用語を表記するため新たに作られた文字がある。漢語音 ts-, tsh- を表記するための文字である。新文字  ts と  tsh の作成手順について、字画数の多少によって、満洲文字  s に縦線を加えて文字  ts を作り、さらに文字  ts に横線を加えて文字  tsh を作ったと想定することはできるし、そのように想定して大過はないのであろうが、それを支える具体的な論拠を問われると、簡単には答えることができない。手順としては、①文字  s → 文字  ts →  tsh の可能性も、②文字  s → 文字  tsh → 文字  ts の可能性もある。②のように文字  tsh から横線を削除して文字  ts としたと理解しても差し支えはないわけである。



文字 s



文字 ts



文字 tsh^⑧

しかしながら、①文字  s → 文字  ts → 文字  tsh の手順で作られたと想定することができるわずかな根拠を『満漢字清文啓蒙』（1730年）という満洲語の学習書にみることができる。それは当該書の巻一にある文字  tsh の書き順である。それによると、 s →  ts →  tsh の順に筆画が加えられている。筆順の可能性としては、 s に先ず「|」を加え次いで「—」を加えて「┘」として  tsh を作っても、 s に先ず「—」を加え次いで「|」を加えて「┘」として  tsh を作っても、どちらでもよかつたはずである。前者の「|」+「—」→「┘」としたのは、文字  ts が先にできていたという事実の反映とみたい。すなわち①  s →  ts →  tsh の順に作られたという作成の手順が、文字  tsh の書き順に反映したと見てよいのではないかということである。

文字  ts → 文字  tsh という作成手順に、文字作成者が持つ音を区別する習慣が反映していると考えるので、次節ではそのことについて検討する。

3. 文字 s, ts, tsh の作成手順に反映した気音の有無

^⑦ 新文字作成の手順については吉池孝一(2020)「女真文字談義(8) — 満洲語文語、文字作製順序、軽声と新文字、借用語の表記—」『女真語と女真文字』愛知：古代文字資料館、2020年1月発行、65-74頁で言及した。本稿はそれを改訂したものである。

^⑧ 挙例の文字は『満漢字清文啓蒙』（1730年）による。

満洲語の破裂音と破擦音の気音の有無については吉池孝一(2021)「現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」において検討した。現代の満洲語口語の破裂音と破擦音には、音質として、閉鎖が強い強音 (tense) と閉鎖が弱い弱音 (lax) や、声の有無や、気音の有無が認められるけれども、話し手と聞き手は気音の有無によって音の弁別をしており、発音器官の緊張の有無や、声の有無は余剰であるとみて特段の不都合はないとした。現代の満洲語口語にあっては、そのようであるとして、過去の満洲語口語ではどのようなであったかということが問題になる。

これについては、吉池孝一(2022)「寧古塔紀略満洲語の破裂音・破擦音の音質(3)一音質の検討」で検討した。17世紀の『寧古塔紀略』(吳振臣著。1721年頃成書)に含まれる漢字で音写された満洲語(文語ではなく口語であることは動詞語尾から判明する)により古満洲語口語の破裂音と破擦音の音質がどのようなであったかということについて検討した。それによると、『寧古塔紀略』の満洲語口語における発音上の二項の対立が、音声としてみた場合にも、話者の発話習慣としてみた場合にも、気音の有無によって成り立っていたため、満洲語の有気音と漢語の有気音、満洲語の無気音と漢語の無気音が、きれいに対応したと想定することができるとした。

少なくとも吉池孝一(2021)(2022)で扱った資料によるかぎり、現代満洲語口語においても古満洲語口語においても、話し手と聞き手の言語習慣において破裂音と破擦音は気音の有無により対立していたとして大過はない。有圈点満洲文字作成当時の満洲語口語が吉池孝一(2021)(2022)で扱ったような満洲語と大きな違いがなかったとしたら、文語の音には口語の音が反映するはずであるから、有圈点満洲文字には気音の有無により音を区別する習慣が反映している可能性がある。

文字 ᡩᡠs → 文字 ᡩᡠts → 文字 ᡩᡠtsh の手順に従って新たな満洲文字が作られたとする前節の議論を認めるならば、文字の作成者は、先ず漢語音 $ts-$, $tsh-$, $s-$ のなかから $ts-$ を析出して文字 ᡩᡠts を作り、次いで残った漢語音 $tsh-$, $s-$ から、 $tsh-$ を析出し文字 ᡩᡠtsh を作ったことになる。漢語音 $ts-$, $tsh-$, $s-$ から $ts-$ を析出する段において、漢語音 $tsh-$, $s-$ と漢語音 $ts-$ を区別した。そうすると、 $tsh-$, $s-$ は有気音で $ts-$ は無気音であるから、文字の作成者は有気音と無気音を区別する言語習慣を持っていたと想定してよい。吉池孝一(2021)(2022)で扱った現代満洲語口語と古満洲語口語と同様に有圈点満洲文字の作成者も気音の有無により破裂音と破擦音を区別していたため、それが新文字文字 ᡩᡠts → 文字 ᡩᡠtsh の作成手順に反映したとみることができる。

4. 結語

文字 ᡩᡠts と文字 ᡩᡠtsh は漢語借用語音 $ts-$, $tsh-$ を表記するために新たに作られた文字であるが、この新文字は文字 ᡩᡠs → 文字 ᡩᡠts → 文字 ᡩᡠtsh の手順を踏んでつくられた。その手順は、文字 ᡩᡠtsh の書き順である ᡩ → ᡠ → ᡩᡠ に反映している。

新たに文字を作ったり、運用法を変えたりする場合、そこに、文字を作成・運用する者の

発音の習慣が反映する場合がある。その観点から、文字 $\text{ᡩᠠ} s$ → 文字 $\text{ᡩᠠ} ts$ → 文字 $\text{ᡩᠠ} tsh$ の作成手順をみる。文字の作成者は、先ず漢語音 $ts-$, $tsh-$, $s-$ のなかから無声無気音の $ts-$ を析出して文字 $\text{ᡩᠠ} ts$ を作り、次いで残った漢語音 $tsh-$, $s-$ から、無声有気音の $tsh-$ を析出し文字 $\text{ᡩᠠ} tsh$ を作った。このことは、有圈点満洲文字の作成者が、吉池孝一(2021)(2022)で扱った満洲語口語と同様に、気音の有無により音を区別する習慣を持っていたことを示す。このような発音の習慣が新文字を作成する段において反映され、文字 $\text{ᡩᠠ} ts$ → 文字 $\text{ᡩᠠ} tsh$ の作成手順となったのである。

興味深いことに、これは契丹語を表記する契丹小字の用法と同じである。契丹小字では、①先ず契丹小字 $\text{ᡩᠠ} s$ で漢語音 $ts-$, $tsh-$, $s-$ を表記し、②次いで漢語音 $ts-$ を析出して $\text{ᡩᠠ} ts$ で表記し、③最後に漢語音 $tsh-$, $s-$ から、 $tsh-$ を析出して $\text{ᡩᠠ} tsh$ で表記した^⑨。満洲語話者も契丹語話者も、漢語音 $tsh-$, $s-$ と漢語音 $ts-$ を区別し文字を振り当てている。これにより満洲語話者も契丹語話者も気音の有無によって音を区別する発音の習慣を持っていたと推定することができる。このことについては中村雅之(2008)^⑩がやや異なる観点から「いま、問題にしている満洲文字と同様に、有気音と摩擦音を同様に扱い、無気音と区別する段階があった。モンゴル語やツングース語の立場から漢語音をとらえると、 $[ts][tsʰ][s]$ の三音を区別する際には、まず無気音の $[ts]$ が最も析出しやすかったのであろう。」(2頁)として契丹小字の区別の仕方と満洲文字との類似を指摘している。

参考文献 (発行年順)

- Möllendorff, P. G. von (1892) *A Manchu Grammar, with Analyzed Text*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- 廣禄・李学訳注(1970)『中央研究院歴史語言研究所專刊之五十八 清太祖朝老滿文原档(第一冊)』台湾：中央研究院歴史語言研究所。
- 金啓琮(1981)『滿族的歷史與生活 一三家子屯調查報告』45-56 頁、哈爾濱：黒龍江人民出版社。
- 亦鄰真(1987)『元朝秘史・畏吾体蒙古文復原』内蒙古大学出版社。亦鄰真(2001)『亦鄰真蒙古学文集』呼和浩特：内蒙古人民出版社、713-746 頁による。
- 福田昆之(1987)『満洲語文語辭典』横浜市：F L L 発行。
- 池上二郎(1994)「満洲語文語の正書法の沿革 一特に o, u, ū について一」『東方学』88、100-110 頁。
- 吉池孝一(2003)「漢語の精母系子音を表わす契丹子小字について」『KOTONOHA』13。吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著『契丹語と契丹文字』愛知：古代文字資料館、2020年12月発行、84-88 頁所収による。

^⑨ 契丹小字の区別の仕方については吉池孝一(2003) 18-21 頁参照。

^⑩ 中村雅之(2008)「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」『KOTONOHA』65、1-4 頁。

- 中村雅之(2008)「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」『KOTONOHA』第65号、1-4頁。
- 吉池孝一(2020)「女真文字談義(8) — 満洲語文語、文字作製順序、軽声と新文字、借用語の表記 —」, 吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著『女真語と女真文字』愛知：古代文字資料館、2020年1月発行、65-74頁所収。
- 吉池孝一(2021)「現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」『KOTONOHA』第228号、20-31頁。
- 吉池孝一(2022)「寧古塔紀略満洲語の破裂音・破擦音の音質(3) — 音質の検討 —」『KOTONOHA』第232号、1-9頁。